

獄窓

夕日に照り映えるニス塗りの家屋の周りを
老人は杖ついて歩き回り続け
黒檀と黄金の輝きに倒れようとする

銃殺の音がただ一度、斜光を伝わって広がり
穏やかに暮れようとする春の一日を
微笑のヴェールに包み込もうとする

ふくらみの溪流は底を沈ませ
ただきらめきの水面を涙に濡らす
全ては神秘的なまどろみと忘却の中へ

(1985.2.23)